

## 特集「エアラインリザベーション」の発刊に寄せて

石 山 耕 一

2013年2月、おおよそ8年余をかけて開発を進めてきたANAの基幹システムである国内線旅客システムが稼働した。現在もなお、世界の大手航空会社では基幹システムをレガシー/メインフレームシステム上で稼働させていることが多く、オープンシステムへ一気にマイグレーションすることが困難とされてきたが、今般のANAの国内線旅客システム開発は、過去世界で例を見ない成功事例といえる。

日本ユニシスは、長年に亘りANAのITパートナーとして国内線旅客システムの開発・運用に携わっており、1978年には米国ユニシスのエアラインパッケージ「USAS」をベースに「RESANA」を稼働させ、次いで1988年には「RESANA」に大幅な機能強化を実施した「able-D」を稼働させてきたが、さらにANAと日本ユニシスは米国ユニシスのオープンエアラインパッケージ「AirCore」をベースにして国内線旅客システムを再構築することとした。

当システムはオープンプラットフォームによる大規模トランザクション処理を中核とした大規模ミッションクリティカルシステムであり、開発プロジェクトの果敢なチャレンジと努力の集大成であるが、つまるところレガシー/メインフレームシステムでもオープンシステムでも、システム化の本質は変わるところがないことを一層確信することができた。

すなわち、システム開発方式/標準化という面では、複数のグループに分割した開発と現行システム開発分の取り込みにて、イテレーション開発技法体系であるURUPを採用し、大規模システム開発のためのプロジェクトマネジメントという面では、米国ユニシスのISビジネス方法論であるTEAMmethod<sup>SM</sup>に自社向けの実践的手続きを加えて整備したISBP/ISEP (Information Services Business Process/Engineering Process)を採用した。とりわけ複雑な旅客アプリケーション業務故に大量のテストが必要となったが、その完遂にはテスト戦略に基づいた系統的なテスト設計/実施が奏功した。

さらに、当システムの基盤となるインフラシステムには、プロダクトベンダーコンソーシアム活動で実施した技術検討/検証成果を基調に大規模トランザクション処理性能、信頼性、可用性、拡張性を実現するプロダクトセットを選定し、当システム用途のフレームワーク(ANACoreFW)を準備することで、旅客アプリケーション全業務を稼働させている。

加えて、きわめて短時間に現行システムからの移行を完了させるための移行計画/移行機能や多種多様な外部システムインタフェースを統一的にカバーするゲートウェイ機能を準備したことなどが特筆すべき成果といえる。

本特集号では、当システム開発におけるプロジェクト管理技術・インフラ技術・ソリューション開発技術などの領域で新たに採用した大規模システム開発プロジェクトマネジメントへの取り組み、オープンな技術で実現したアーキテクチャ設計、インフラシステム、フレームワー

クや業務ソリューション開発の概要, テスト戦略, 移行などを紹介している.

本特集号が, 規模/対象業務によらずあらゆるシステム開発に関わる方々はもちろんのこと, 各企業の情報システム利用部門の方々の一助となれば幸いである.

(執行役員 公共システム本部長)